

太宰府の文化財

(360)

大野城跡 山上の池 古代

特別史跡・大野城跡は今年、築造

1350年を迎えました。大野城は、市の北にそびえる四王寺山の山上に設けられた国内最大級の古代山城です。『日本書紀』天智天皇4(665)年8月の記事には、百済の貴族・憶礼福留と四比福夫を朝廷が筑紫へ派遣して大野城と基肄城(佐賀県基山町)を築かせたとあり、日本(當時は倭国)と亡命してきた旧百済国の人々などで築いた城として知られています。その後、奈良・平安時代と200年以上にわたって大宰府の北



鏡池



けいさしの井



公山城王宮址の蓮池

の守りとなりました。山のいただき

をめぐるよう全長約8km、高さ6~8mもの土塁や石塁が築かれ、中に入るための門がこれまで9カ所みつかつています。城内の丘の上は造成され、倉庫跡とみられる礎石群が点在しています。

こうした中、川もない山のの上に水を貯めた池や井戸があります。大野城の南西側、水城・国分方面からの出入口となった水城口城門のそばには、「けいさしの井」とよばれる石組みの井戸があり、平安時代の土器な

どが出土しています。また大野城の南側、観世音寺や太宰府駅方面からの出入口となった観世音寺口城門や太宰府口城門のそばには、増長天礎石群の脇に「鏡池」があり、いつも水をたたえています。

これらには共通点があります。一つ目はその形と大きさです。鏡池は直径約15m、深さ2mほどの窪地を利用してあります。けいさしの井も、じつは同様の大きな窪地の中に井戸を設けたもので、もともと鏡池のよ

うな池だったと考えられます。二つ目は山の頂や稜線沿いの平野を見下ろす場所の近くにあることです。このような窪地は大野城東方の土塁沿いにもあり、拠点となる場所に備わっていたのかもしれない。またこれ

らは天水を利用した池とみられますが、鏡池が不思議と枯れないことをみると、何か工夫もありそうです。

こうした池跡は基肄城にもあります。東峰の頂上には「つつみ池」と呼ばれる直径18m、深さ1.5mのすり鉢状の窪地があり、地表下1mに水を貯めるための粘土層が見つかり、池跡と確認されました。西側の基山山頂近くにも直径17m、深さ1mの窪地がみられます。

さらには韓国・百済の山城にも山頂に池が設けられていました。百済最後の都・扶余の北東約30kmには、扶余以前の都・熊津があります(忠清南道公州市)。その中心は百済王が住まう公山城という山城で、この山頂の王宮には「蓮池」と呼ばれる貯水池が備えられていました。これは百済系の山城に備えられた山上の池の代表的な事例といえます。

これまであまり注目されていませんでしたが、類例をひもとくことで、これらの池も1350年前のもので、日本と百済をつなぐ遺構であることがうかがえそうです。

文化財課 井上信正